
(陸に上がった人魚姫シリーズ?

らう

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

(陸に上がった人魚姫シリーズ?)

【NZコード】

N0160N

【作者名】

ひらつ

【あらすじ】

陸に上がった人魚姫の続きの物語

戴冠式・序幕

金属の割れる音で目が覚めた。

「誰だ？！」

ミラノは急いで音のした方へと走る。黒い人影とぶつかった。尻餅をつく。少し潮風の匂いがした。

「泥棒かあ？」

ミラノの呼びかけに黒い影は走り去る。

念の為に何が盗られたのかをみておくが、ゝゝミラノは立ち上がりて影が走ってきたほうを見る。

「！！」

そこにはミラノが戴冠式で被る筈の冠が力任せに壊されていた。

「どうペるげんがー？？」

ミラノは苦笑した。まあ自分は不吉な存在だし、誰もが自分を認めてくれてるとは最初から思ってなどいない。そもそも自分だって王位なんか継ぎたくない。それでも、それでも、否定されるのはしない。

正午。

ユリアが王室を尋ねてきた。

「呼び立ててすまなかつたな。」

「構わんが、一体どうしたんだい？」

王は今朝、ミラノから訊いた事をユリアに話した。

「海の獣を倒したお前たちにもう一度頼みたい。どうか犯人を捕まえてくれ」

・・・たち？

「またミラノの子守か。まあ私は構わんがね。」

「・・・僕も行くの？」

自分は完全に蚊帳の外に居たものだと思っていたミラノが尋ねた。
と、同時にユリアに頭をわしゃわしゃやられる。

「なあミラノ、お前の物を壊した犯人を捜すのは、お前の役田じゃないか。」

ユリアの笑顔に軽い殺意が浮き上がってるのを感じてミラノは物凄い勢いで頷いた。

ミラノとユリアは港に来ていた。

ユリアの船に乗り込もうとする、と、ミラノはユリアの帽子に違和感を感じた。いつもならそこに乗っかっている筈のクリスが居ない。

「あれ、クリスは？」

「明日、迎えに行くよ。今日は神殿で過ごしたいらしい。」「はあつ？！」

（クリスを殺した犯人って、まだ分かつてないんだよな。単独行動は危険なんじゃ・・・）

ミラノの思考を汲んだユリアは少し悲しそうな目をした。

「あの口は、なんで海に生まれ変わったんだろうね・・・」

「生きたかったからじゃないの？」

「そうだな。きっと殺されずに、生きたかったんだろうな・・・。」「

クリスは神殿の間に座した。

ステンドグラスの窓から夕日が差し込んでいく。

（神様。神様。神様。）

何度呼べば応えて貰えるだろ？。いや、そんな日は永遠に来ないんだ。

（その証拠が現在の私の姿じゃないか・・・）

身の丈は一寸。

自らの血で染まつた深紅の髪の毛。

何を信じて生きればいい。何を呪つて生きればいい。

考えすぎて眉間に出来た皺は簡単には取れそうにも無い。

ばたんっ

神殿の間の扉が乱暴に開けられた。

そこに立つっていた娘を見たとき、クリスは激しい殺意を抱いた。

「本当に馬鹿な人。この私を、愛さないなんて！！」

次期王妃の娘だった。

「あの人から、あの娘を引き離せば私の物になると思つたのに・・・」

（あの娘？ 何だろう、嫌な汗が止まらない）

クリスは自分の震えを制御できずに居た。

王妃は泣いている。どうにか気付かれずにやり過ごしたい。やり過ごしたいけれども。

「ねえ。」

クリスは王妃に話しかけた。

この震えの意味を、知りたかった。

戴冠式・王冠編

僕が戴冠式に被る予定だつた王冠は、何者かに粉々に碎かれてしまつた。今回、王が僕に出した条件は3つ。1、王冠を壊した犯人を捕まえること。2、代わりの王冠を作り上げること。3、犯人に僕自身を認めて貰うこと。そして父が今回も僕の保護者に選んだのは、海賊の女頭領・ユリア。僕は途方にくれてユリアの船の甲板から海を見ていた。

「頭領、あいつ誰ですか？」

やたら囁つきの悪い背の低い男の子が僕を指差す。

「ああ、王冠を壊された王子様だよ。」

一瞬男の子の目に憎しみのような冷たい炎が宿る

「ミリノとかいうバカ王子ですか？」

(バカ王子？失敬な！)

「バカは余計だ、ムラサメ。王冠を壊した犯人を捜しにいくぞ。」

「あ、それなら俺です。」

一同沈黙。

僕はムラサメと呼ばれた少年に聞こえるように言った。

「金剛石よりも硬い石で作られた王冠を、君なんかが壊せるとは思えないんだけど。」

「バカはもの知らねーな。どんな造形物だろうと、必ずもうろい部分

「があるんだよ！」

（こいつ、よりによつてバカじやなくて王子のほう取りやがつた…。）

「やめろ、一人とも…！ ムラサメ、なんだってそんな事をしたんだ？」

コリアの問いにムラサメがそっぽを向く。

「だつて…・・・コリア様に馴れ馴れしいんすよコイツ…！」

「は？」

「コリア様は俺たちの姐さんで！ 頭領で！ 肝つ玉母さんなのに…！」

コリアが拳を作つてムラサメをぶん殴る。

「ミラノはともかく王妃や現国王にバレたらお前は手打ちだつたんだぞ？…！」

ムラサメは勢いよく壁に激突した。コリアつて本当に強かつたんだ…。

「ムラサメ。」

コリアが冷たい声でいう。

「今すぐ新しい王冠を作れ。明朝、それを国王に献上する。」

「頭領！ 俺はこんな優男やさおどをこじくおうにするなんて嫌です！」

ムラサメが首を横に振る。僕はムラサメの前に立ちはだかつた。こうこう時はどうすればいいんだろう。幸いムラサメは瀕死だ。力づくで頼めば聞いてくれるかも知れない。けど

「//リノ？…！」

僕は生まれて初めて土下座をした。

「あなたの力が必要なんだ！！ 僕は、今よりもつといつぱい頑張つて、貴方がこれから作る王冠を被るに相応しい男になる…・だからどうか…。」

チツ。

ムラサメが舌打ちをした。

「悪かつたよ、お前のこと知らない癖にあんな」として。「僕は顔を上げてムラサメを見た。ムラサメはばつが悪そうに、そつぽを向いた。

翌朝。僕たちは王室にいた。

ムラサメの作った王冠を王に見せていた。王はケースに厳重に入れられた王冠をまじまじと見つめ、賞賛の入り混じった深いため息をついた。

ムラサメはあっさりとこいつ言った。

「王冠をぶつ壊したのは俺だ。」

王は黙つて聞いている。

ユリアが頭を下げて口を開いた。

「ムラサメはかつてのお前の戦友だ。そして私の部下だ。とかいえ、この非礼を詫びるにはどんな言葉も足りぬ。ムラサメの失態は、当然私の責任だ。…手打ちにかけて気が済むのなら、それは当然私であるべきだ。頼む、若者から、お前のかつての友から未来を摘むような真似だけはしないでくれ。」

王はユリアの嘆願を聞いて小さく笑った。

「子供の頃から、ムラサメが羨ましかったよ。仲間内では一番年下

なのに、一番器用で。その奔放さにも憧れた。頬むから顔を上げてくれないか？ 私を、惚れた女に土下座させるような、惨めなおとこにしないでくれ、ユリア。」

ユリアが顔を上げる。安心感から田元が涙で少し滲んでいた。

王はムラサメに向き直り、話しかける。

「友よ、お前の技術は素晴らしい。どうかこの国で、鉄鋼業のリーダーとしてその腕をふるつてはくれないか？」

王の問いにムラサメは深いため息をついた。

「お断りだ。俺のすべては今も昔も変わらねえ。頭領だけだ。でもつて、お前と俺は友達だ。だから俺の力が必要なときは云え。俺たちはいつでも海にいる。」「

ムラサメの言葉に王は優しい顔をした。

「昔と変わらないな、お前は。」「

ムラサメも優しく笑つて王に言葉を返す。

「それと、ミラノをあんまりうちの頭領に近づけないでくれ。昔のお前を見ているようで嫉妬しちまつ。」「

その一人の会話を聞いた時、僕は自分がユリアに惹かれ始めていることに気付いた。

クリスの過去、王妃の本音（前書き）

ムラサメが王冠を作り直してゐる頃の、クリスのお話。

クリスの過去、王妃の本音

「わたくし 私ね、ミラノ様がどうしても欲しかったの。その為なら命を投げ打つ覚悟でしたわ。」

王妃は小さな客人に紅茶を入れながら言った。

クリスは少し焦っていた。

つい先ほど、教会で泣いてる彼女に話しかけたが為に、何故か恋敵とお茶をする羽目になってしまった。しかも先程から、嫌な汗が止まらないが、可愛い物好きの自己中王妃は気付いていないようだ。「惚れた男の為に死ぬ気だったの？ いつ死んでみたら、それがどんなに愚かな考え方分かるわよ。」

クリスの言葉に王妃は高い声で笑う。

「いやねえ、違うわよ。だって『私』が死んだら『私』が幸せになれないじゃないー他人を蹴落として、殺して、騙して、脅して。それでもあの手に入れたかった。だから彼に近づく女の子を殺したの。同情はしたけど後悔はないわ。だって後悔したって『私』はしあわせになれないもの。」

クリスは呆れて言った。

「さつき、命を投げ打つ覚悟って言つたじやない。」

すると王妃は真顔で彼女にこう告げた。

「ええ、彼が手に入るなら、他人の命をいくつ投げ出したって構わないわ。」

しばしの沈黙。

胸を押されて、クリスが声を絞り出した。

「殺したこの名前、覚えてる？」

「名前？ 興味ないわ。ただの私の、踏み台だもの。」

クリスはビックリして王妃を殺そつか、それしか最早考えられなかつた。

「…クリスティーナ。」

「え？」

「クリスティーナよ、かつての私の名前よ！…」

王妃の部屋の扉がノックされる。

「助けて…許して、お願ひ助けて！…」

王妃の悲鳴に部屋の扉が開かれた。

現れたのは教会に出入りしている神父ークリスティーナの父親だつた。

「お…お父…さま？」

「神父様！早くこの化け物を退治して頂戴！…」

王妃はさう言つて部屋から逃げ出した。

「お父様！…私よ、クリスティーナよ！…」

老神父はクリスを見て戸惑つたが、すぐに胸の十字架を握り締めてこう告げた。

「私の娘の名を語るな、お前はただの悪しき亡靈だ！…」

その言葉はクリスを絶望の淵へと追いやつた。

「…お父様は、私の死を悼んでは下さらぬの？あの忌まわしき運命を憎んでは下さらないの？…」

それから暫くの間、クリスの姿を見る者はなかつた。

クリス惨殺

「ねえ父さん。」

僕は父と食事をしながらこう言つた。

「僕、結婚するならユリアがいい。」

父はケホケホとむせこんでいる。

「ユリアだって海賊なんかより、王妃のほうがずっと幸せになれるよ！」

白ワインをくいっと飲み込んで父が言つ。

「ミラノ。その頼みは、お前の父としてでなく、一人の男として断る！」

「えー、なんで？」

僕の言葉に父はため息をつく。

「あれはなあ、私やムラサメが焦がれて焦がれて、それでも手に入れられなかつた女性ひとだ。優柔不斷なお前が、気安く触れられると思うなよ。」

その時、僕は初めて父の『男』の顔を見た気がした。

「ばたんっー！」

物凄い勢いで食堂の扉が開かれた。

「食事中だぞ、騒々しい。」

僕の言葉に家臣の一人が頭を下げる。

「申し訳ございませんー！ですが、緊急事態でござりますーーー！」

僕と父は家臣に促されて教会へと走った。
そこで僕らが見たものは……。

真っ赤な血で染まつた髪の毛。人形のような大きさの、見慣れた
はずの顔は、血の気が引いて真っ青になつていて。そして何より、
胸の部分が大きな杭で打たれています。

「クリス？ ク里斯！ ク里斯！！ 認めないぞ、こんな悪戯！！」

老紳父が、そっとそれに触れる。彼も泣いているのか。

僕と老紳父以外の人間はあれは人形だつたと思っている。
誰かの悪趣味な悪戯として、王室では処理された。

そして数日が経つた。

僕は廃人のようになっていた。父が心配している。ユリアも。そ
れは分かつている。けれど……。

今日もユリアが僕の様子を見に来てくれた。そしてそっと耳打ち
する。

「クリスが大変な事になつていてる。」

ユリアは父と暫く話した後、僕を肩に抱きかかえて父に言つ。

「王よ、お前の宝、
私が暫く預かるぞー。」

クリスの懲悔、ミラノの説得

僕はまたユリアの海賊船に乗っていた。

陸より船に居るほうが長いなんて、何だか本物の海賊みたいだ。ユリアの話だと、王室教会で発見されたクリスそつくりの物は、ムラサメが作つた人形だった。

ある島で暴れているクリスの情報を得たユリアが、クリスを処刑させない為に考え付いた苦肉の策だつたらしい。僕は先刻それを知らされ、クリスの暴れているという島に向かっている。

「見えました、頭領！！」

ムラサメが展望鏡を覗き、合図する。
もうすぐクリスの要る島に着く。

「最初に言つておく。」

ユリアは厳しい顔をして僕に話を切り出した。
「もしクリスがもう元に戻れぬ化け物となつて人を殺し続けるなら、
その時は私が射殺する。」

僕は背中に刃物を突き立てられたかのような感覚に陥つた。

- 射殺？

「だからミラノ、お前は全力でクリスを説得しろ。」

「……分かった！」

獣や人間の骨があちこちに散乱していた。血の臭いが辺りを包んでいる。背後に殺氣を感じ、僕は咄嗟に振り向いた。

「才前エモ、殺スウ。」

真つ赤な髪、真つ赤な…涙？

「泣いてるの、クリス？」

「煩イ、死ネ。」

様子を見ていたユリアが二丁の拳銃を構える。

「待つてユリア！」

「仕方あるまい。悪魔に墮ち罪を重ねさせるくらいなら、せめて人間として、私の仲間として死なせてやるべがだ。」

クリスが僕を、獣から剥ぎ取った爪のような剣で刺していく。僕はそれをぎりぎりで避けながらユリアに叫ぶ。

「理屈なんて知らない。人間だろうが、悪魔だろうが、関係ないよ。クリスは僕の隣で生きるんだ！これから先も生きるんだ！！」

「諦めろ、ミラノ。それは私たちの知っているクリスじゃない！！！」

クリスの剣が僕の右肩を、ユリアの銃が僕の左腿を貫く。

激痛、焼けるような痛みだった。僕はそれでも腹の底から叫んだ。

「断る…！」

眼の前ではクリスが泣いている。やめてくれ、泣かせるために助けたんじゃない。泣き止んでくれ。

彼女は震えた声で僕に尋ねる。否、世界に問う。

「私は…存在、して…いいの？」

僕はクリスの涙を指で拭つた。

「居てくれなきゃ、困るよ…。」

遠くで高い声がした。まるで悪魔のよつた声だった。

「撃ちなさい。」

王妃の結末

砲弾が放たれて数分後。

粉塵が上がりつゝ。辺りは煙に包まれて何も見えない。僕がクリスの無事を確認していると、遠くでムラサメの声がした。

「頭領？…嘘だ、頭領…一つユリア！！」

ユリアが僕たちを弾き飛ばして庇ってくれたのか。ユリアは、ユリアは無事なのか。

「ユリア！！」

僕とクリスはユリアの元へ駆け寄った。

ユリアは息も絶え絶えに話す。

「ムラサメ、私の最期の願いを聞け。…今から、頭領はお前だ、これからも船を…私たちの、国を頼むぞ…。」

「国なんか知らん！俺はお前だから付いてきたんだ…皆だつて同じだ！！」

ムラサメがユリアの肩をきつく抱きしめる。

ユリアはいつもと同じ慈愛に満ちた微笑を浮かべた。

「クリス、ミラノ。ごめんな。こんな世界をお前たちに託すこと、すまないとつてる。けどな…それでも次代を担うのは、お前たちなんだ。…私たち大人はお前たちに自分の生き様を見せる以外、何もできない。…何もしてやれないんだ…。」

僕はユリアの傷口から流れる血が怖かつた。血の止まらない傷口が怖かつた。このままじゃユリアが死んでしまうんじゃないかと怖くて堪らなかつた。

「ユリア、もう喋らないで！ 傷口がーっ…」

「クリス、お前の取り巻く世界を否定するな。ミラノ、決してクリスの命を諦めなかつたお前の、治めるあの国を見たかつた。…大丈夫、お前たちならきっと大丈夫だ…。」

ムラサメがユリアをきつく抱きしめた。

「ユリア。俺の、生涯をかけて守りたかつた…。」

ムラサメが砲撃してきた船に宣戦布告する。

「海の王者・無敵艦隊を敵に回して楽に死ねると思つなよ。僕はムラサメを御した。」

「何故止める？！」

ムラサメが僕の胸座を掴む。

僕は砲撃してきた船の旗に見覚えがあつた。あれは確か…。

「王妃の船だ。だったらご指名は僕だよ。クリスを頼む。」

僕はクリスをムラサメに預けて、王妃の船に飛び乗つた。

「航海には連れて行かないって言つたハズだけど?？」

僕の言葉を聞いた王妃は舌打ちした。

「これは航海などではございませんわ。わたくし私、皆様を殲滅せんめつしに参りました。亡靈退治の事故に見せかけてね。」

王妃の目は本気だつた。

「ねえミラノ様、貴方を見てると苛々しますわ。…私を好きになつて。それができないなら死んで。私を映さない貴方の心なんか要らない。この世に存在することさえも許さない…物言わぬ死体になつた時、もう一度貴方を愛してあげる！－！」

僕の剣は彼女の心臓を貫いた

僕はその時、彼女を初めて正面から見た。

彼女もまた、脆い、少女だったんだ…。それでも…。

「僕はお前を忘れない。一生憎んで忘れない。」

僕の言葉に王妃は幸せそうな顔をして泣いた。

「ようやく、私を見ててくれた。…胸が、痛いわ…そう、これが…恋
なのね…。」

それぞれの結末

クリスは懺悔箱の中に座つて幼い少女の懺悔を訊いていた。

「大丈夫、神はきっと貴方の罪をお許しになります。」

「ありがとう巫女様！！」

少女は嬉しそうに懺悔箱を飛び出し、母親の元へ駆けて行つた。クリスはそれを穏やかな気持ちで見守つている。

ミラノが王位を継いで3年が経つた。ユリアの葬儀の後、すぐに戴冠式を行つた。ミラノも王も、それがユリアの一番の弔いになると信じたからだ。王妃の国との戦争は、ムラサメが仲介してくれたお陰で無事に回避できた。王は少し恥ずかしそうに言つ。

「ミラノ。お前が国王となつて3年…あの忌まわしき魔女の予言からもう16年が経つたのだな。私は、自分を恥ずかしく思うよ。…占いなどではなく、自分の子供を、もつと信じるべきだったのだな。」

「

ミラノは優しく笑つた。

「どうでもいいよ。どうでもいいんだ、そんな事は。クリスやユリアの死は僕の責任だった。僕が王妃ともつと向き合つべきだった。あれこそが、大いなる災いだったんだと思う。だけど、それでも、僕は彼女たちに会えて良かつたと思つてしまつんだ。」

「ユリアか…素晴らしい女性だった。」

「うん…さあ父さん、行こう。皆が待つてるよ。」

今日は1年に1度の国民交流会。

貴族も王族も神官も商人も軍人も平民も、国民すべてが集まり語り合う祭りの日だ。

町人の一人が叫ぶ。

「港に海賊船が着いたぞおおおおー！」

一同の顔に不安の汗が浮かぶ。ミラノがマイクを通して招待客たちに告げる。

「構わぬ、あれは僕の友人だ！海賊だろうが山賊だろうが、この国に生きるすべての人人が今日は招待客だ！ さあ皆、宴を楽しんで！」

「！」

船着場から車椅子を押してくる少年が人懐っこい笑顔でミラノの名前を叫ぶ。

「久しぶりだなあ！ミラノーー！」

国民たちは海賊の意外な素顔に戸惑っている。

「あれが海賊？ 年端もいかぬ子供ではないか！」

「なんと可愛らしい少年ではないか。」

「しかし我らの国王様を呼び捨てとは……！」

国民たちが率直な感想をつい口に漏らす。

クリスが少し遅れて祭り会場にやつて来た。

「ミラノとムラサメはつけーんーー！」

クリスがムラサメに飛びつく。

「離れるチビー！」

そんな光景を見て車椅子の淑女が慈愛に満ちた顔で微笑む。

「！」

ミラノもクリスも、ミラノの父も田を見開いた。

ムラサメは誇らしそうに言つ。

「俺たちの頭領サマがあんなんで、くたばるかよ。…まあ記憶にそ
失つているが…正真正銘、ユリア様ご本人だ。」

クリスとミラノは脱力して座り込んだ。

「何だよお前ら、嬉しくねーのか？」

ムラサメが一人にくつてかかる。

「止めんか、ムラサメ！…活気のあるいい国だな…お前が王か？」

ユリアの問いにミラノは心からの笑顔を向けた。

「今日は、王ではありません。一人の国民です、そして、貴方の古
い友人です。」

「そうか。すまない、昔のことは覚えていないが…現在のお前を、
友として誇らしく思うよ。名は？」

「ミラノ。僕の名前はミラノ。…ねえユリア、僕のこと思い出さな
くてもいいよ。忘れていても全然構わない。そりやあ少し寂しい
けど、でも。貴方が生きていてくれたことが、本当に嬉しいんだ！」

僕は自分で言いながら泣きそうになっていた。

クリスが僕の頭によじ登つて、頭のてっぺんをペチペチと叩く。
「相変わらず泣き虫ねミラノ。ユリアが困惑してるじゃない。久し
ぶりね、ユリア。話したいことが山ほどあるわ。」

クリスの所業を見かねたユリアが自分の被つていた帽子をクリス
に差し出す。

「これは可愛らしいお嬢さん。帽子にのつてみるかい？」

「あら、懐かしいわね。」

クリスは昔の定位置にちょこんと座った。

「やっぱここが一番落ち着くわあ。」

帰りがけ船の甲板から国を見ていたムラサメが呟く。

「いい国に、なりましたねえ。コリア様」

「…ああ。彼らなら、きっと大丈夫だ…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0160n/>

(陸に上がった人魚姫シリーズ?)

2010年10月10日03時27分発行